

令和3年度スポーツ庁委託事業
障害者スポーツ推進プロジェクト
(障害者スポーツ用具活用促進事業)

成果報告書

2022年3月

公益財団法人福島県障がい者スポーツ協会

1 事業趣旨

【事業の背景】

福島県障がい者スポーツ協会は、県内障がい者スポーツの振興を総合的に推進するための組織として、各スポーツ教室の開催やスポーツ指導員の養成を行うなど、中核的な役割を担ってきた。

特に、「運動導入教室」では、運動をはじめるきっかけの場として、運動指導はもちろんのこと、補装具等についての相談・指導等も行なっている他、県内各競技団体と連携し、各競技種目に専門的に挑戦できる「種目別スポーツ教室」等を開催している。

これらの成果等により、障がいのある人たちが継続的にスポーツに取り組むことのできる環境は整いつつあるものの、特に用具が必要なスポーツ(競技)については、気軽に挑戦することは未だ難しい状況にある。

【事業の目的】

福島県障がい者スポーツ協会のこれまでの事業実績やノウハウ、各団体等とのネットワークを活かしながら、貸出可能な障がい者スポーツ用具の拡充を図ることにより、これまで以上に多くの方が、多様なスポーツに取り組める環境を整備する。

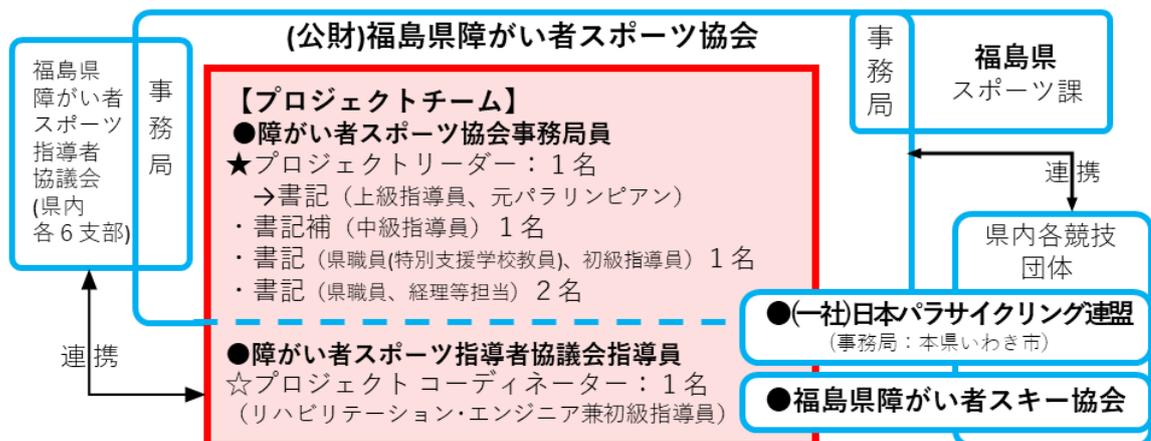
また、新型コロナウイルス感染症の影響による外出自粛が、健康二次被害となるなど、障がい者にとっても深刻な問題となっている現状を踏まえ、屋外で実施可能なサイクリングとスキーに必要な用具を整備することで、コロナ渦における健康増進にも寄与する。

2 事業実施体制

福島県障がい者スポーツ協会事務局に、本事業のためのプロジェクトチームを設置した。

チーム員には、協会が実施している各種事業に長年携わってきた、リハビリテーション・エンジニアである指導員をコーディネーターとして配置、この他、関係競技団体で構成することにより、確実かつ効果的な事業遂行体制を確保した。

【事業実施体制イメージ】



3 取組内容

(1) 実施概要・スケジュール（実績）

実施 時期	実施事項		
	(1) 用具の整備・貸出に 向けた調整、その他	(2) パラサイクリング 体験教室の開催	(3) パラスキー 体験教室開催
11月 (18日 受託～)	<ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクトコーディネーター 委嘱 ・用具(機種)の選定、発注 	<ul style="list-style-type: none"> ・教室開催に向けた準備・打合せ ※プロジェクトコーディネーターを中心に事務局、 競技団体、講師、会場等と調整 	
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・活用方法、管理等の検討 	<ul style="list-style-type: none"> ・17日：パラサイクリング 体験会@運動導入 教室開催 ・パラサイクリング体験教 室募集開始 	<ul style="list-style-type: none"> ・パラスキー体験教室 募集開始 ・19日：パラスキー体験 教室開催(第1回)
1月		<ul style="list-style-type: none"> ・16日：パラサイクリング 体験教室開催 	<ul style="list-style-type: none"> ・23日：パラスキー体験 教室開催(第2回)
2月	<ul style="list-style-type: none"> ・実績報告書作成 ・体験教室の実績等を 踏まえた、貸出等ルールの検討 	<ul style="list-style-type: none"> ・精算等 	<ul style="list-style-type: none"> ・精算等
3月	<ul style="list-style-type: none"> ・精算等 ・貸出ルールの決定・貸出開始 		

(2) 整備した用具等

- ①ハンドバイク シティ7 (20インチ駆動輪・若年者仕様) 1台
- ②ハンドバイク シティキッド (16インチ駆動輪・子ども仕様) 1台
- ③バイスキー バイユニーク (子ども仕様) 1台
- ④チェアスキー 普及モデル (若年者仕様) 1台

※この他、トライシクル自転車を整備予定であったが、海外製であるため、新型コロナウイルス感染症の影響により製造・輸入が遅れ、事業期間内の納品と活用が見込まれない可能性が高くなったため、今回の整備は見送ることとした。



①ハンドバイク (20 ㇿ) ②ハンドバイク (16 ㇿ) ③バイスキー ④チェアスキー

(3) 体験教室

～パラサイクリング体験会・体験教室～

①パラサイクリング体験会@運動導入教室

日 時：令和3年12月17日(金) 18時～20時30分

場 所：福島トヨタ クラウンアリーナ（福島市仁井田字西下川原 41-1）メインアリーナ

概 要：県障がい者スポーツ協会が開催する、運動導入教室（福島市）の参加者・スタッフを中心に体験会を開催。

スタッフ：県障がい者スポーツ指導員等3名、

事務局（本事業リーダー、コーディネーター、他協会職員2名）

参加者：7名（+付添いの家族6名）

名前	性別	年齢	障がい名	主に挑戦した自転車	←経験	普段主に取組むスポーツ
A	女性	10代	二分脊椎	ハンドバイク	2回目	車いすバドミントン
B	女性	20代	脳性麻痺	ハンドバイク	初	車いすバスケットボール
C	女性	10代	知的障がい	トライシクル (フレームランナー)	初	バスケットボール
D	女性	30代	脳性麻痺	電動バイク	初	ボッチャ
E	男性	10代	脳性麻痺	トライシクル (フレームランナー)	初	ボッチャ
F	男性	10代	脳性麻痺	ハンドバイク・ ロードバイク(二輪)	初	バスケットボール
G	男性	30代	変形性股関節症	ハンドバイク	初	車いすバスケットボール

実 績：

●教室タイムテーブル

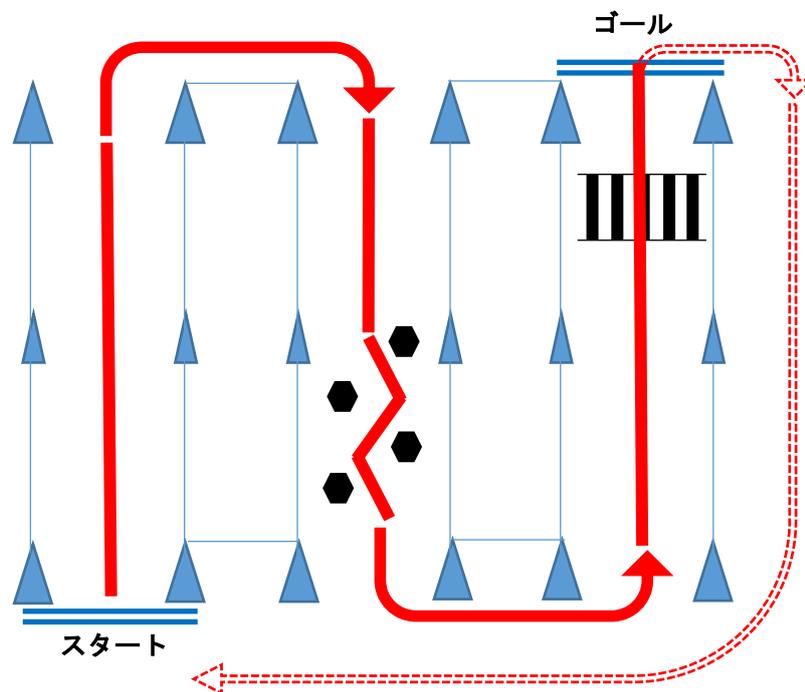
- ・18:00～ 受付・準備運動・交通ルール説明
- ・18:30～19:15 3名フィッティング・体験（+家族や指導員）
- ・19:30～20:15 4名フィッティング・体験（+家族や指導員）

※スタッフもほとんどがパラサイクリング用具の指導は初めてであったため、安全性を重視し、前半・後半で参加者を分けて実施した。

●使用した自転車

- ・ハンドバイク ×3台
- ・ハンドバイク(電動) ×1台
- ・トライシクル(フレームランナー) ×1台
- ・ロードバイク(二輪自転車) ×1台

●コース（バスケットボールコート1面分を使用して設営）



●まとめ（参加者感想等）

※普段はそれぞれ別のスポーツに取り組んでいるが、視野を広げてもらうため、パラサイクリング競技に挑戦してもらった。

・1名以外、自転車は初めての経験とのこと、最初はあまり積極的ではなかったが、実際に乗ってみると、「スピード感があって楽しい！」と何周もしていた。障がいの程度が重い方も、電動のハンドバイクに乗車するなど、全参加者が一緒に体験することができたのもよかった。

障がいを受傷してから初めて自転車に乗ったという男性は、「思っていたよりうまく乗ることができ、楽しかった。」と新たな自信も見せていた。

・体験前には、公道での自転車の乗り方といった、「ルールを守る」ことの重要性を併せて学ぶなど、社会性の醸成にも寄与する内容とした。

・今回事業で整備した用具を活用し、こうした既存の教室参加者にも積極的に体験してもらうことで、各人の適正や新たな可能性を模索していくことは、非常に有意義な機会になると感じた。今後も定期的にもこうした機会を設け、様々なスポーツに興味・関心を持ってもらえるようにしたい。

【12月17日(金)導入教室でのパラサイクリング体験会の様子】



↑ 安全な自転車の乗り方・公道での自転車の乗り方（ルール）を学ぶ



↑ ハンドバイクやトライシクル(フレームランナー)など様々な自転車に挑戦



↑ 障害物の回避や「止まれ(横断歩道)」も練習

②パラサイクリング体験教室

日 時：令和4年1月16日（日） 9時～12時10分

場 所：いわきFCパーク（いわき市常磐上湯長谷町釜ノ前1-1）駐車場

概 要：（一社）日本パラサイクリング連盟と連携し、公募した参加者を対象に体験教室を開催した。

講 師：（一社）日本パラサイクリング連盟 沼部早紀子コーチ

スタッフ：県障がい者スポーツ指導員3名、エンジニア1名

事務局（本事業リーダー、コーディネーター、他協会職員2名）

参加者：6名（+参加者・スタッフの家族6名）

名前	性別	年齢	障がい名	主に挑戦した自転車	←経験	普段主に取組むスポーツ
A	男性	20代	自閉症	トライシクル (フレームランナー)	初	特になし
B	女性	40代	二分脊椎症	ハンドバイク	3回目	卓球
C	男性	40代	先天性骨形成不全症	ハンドバイク(電動)	2回目	卓球
D	女性	40代	四肢麻痺	ハンドバイク	3回目	特になし
E	男性	20代	知的障がい	トライシクル ロードバイク	初	水泳、サッカー
F	女性	30代	視覚障がい	タンデム	3回～	柔道

実 績：

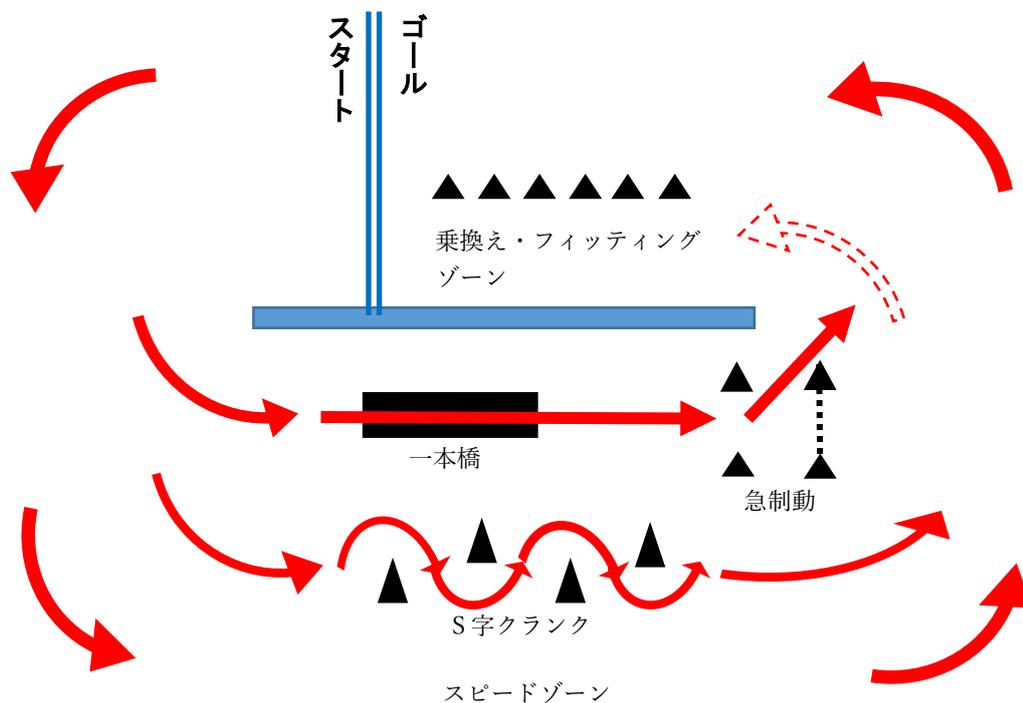
●タイムテーブル

- 9:00～ 受付・準備運動・機材フィッティング
- 10:00～ 開会式（協会挨拶、講師紹介(挨拶)）
機材紹介/乗り方説明、コース/ポイント説明、模擬走行
- 10:15～ コース走行開始
- 11:10～ チームリレー
- 11:40～ 日本パラサイクリング連盟から、競技・パラリンピックの裏話
- 12:10 教室終了（協会挨拶）

●使用した自転車

- ハンドバイク ×4台
- ハンドバイク（電動）×1台
- トライシクル(ペダルあり) ×1台
- トライシクル(フレームランナー) ×1台
- ロードバイク(二輪自転車) ×1台
- タンデム ×1台

●コース（いわきF Cパーク駐車場の一角で設営）



●まとめ（参加者感想等）

- ・下肢障がいのある方々は、過去に2～3回ハンドバイクを体験したことがあったが、気軽に体験できる機会が少ないため、今回、久しぶりに体験することができてよかったし、またやりたい（次回は公道を走りたい）との意見があった。
- ・自閉症及び知的障がいのあるおふたりは、当初ご家族が非常に心配していたが、トライシクル（フレームランナー）で乗車の感覚を掴み、知的障がいの男性は、ロードバイク（二輪）を乗りこなすまでになっていた。
- ・教室の最後には、（障がいのない）家族やスタッフも含め、全員で2チームに分かれてリレーを行ったが、障がいに限らず、性別・年齢・経験など、お互いの特性を理解し合い、走行順を話し合うことができていたことも大きな成果だと感じた。
- ・体験後は、日本パラサイクリング連盟のコーチ及びエンジニアから、パラリンピックでの経験の他、様々なスタッフ（エンジニアの他、補装具技師など）がチームの一員として活躍していることなどの説明を受け、今回参加した指導員や家族も含めた参加者が、パラサイクリング競技への理解を深めることができた。
- ・参加者には、今回事業で整備した自転車を貸し出せることはもちろん、現在、日本パラサイクリング連盟で、毎月1回体験教室を実施していることから、そこへの参加案内など（※今回事業で整備した自転車も当該教室で活用していく予定で調整）、今後の積極的な参加やスポーツの実施を呼び掛けた。

【1月16日(日)パラサイクリング体験教室の様子】



↑ 各人に合わせて機材をフィッティング



↑ 開会式 (あいさつ)



↑ 機材の特徴及び乗り方の注意・ポイントの説明



↑ 体験時の様子



↑ 最後は2チームに分かれてリレー



↑ サイクリングの魅力について講話

～パラスキー体験教室～

①第1回パラスキー体験教室

日 時：令和3年12月19日(日) 8時30分～15時00分

場 所：グランデコスノーリゾート（耶麻郡北塩原村桧原荒砂沢山）

概 要：福島県障害者スキー協会と連携し、公募した参加者を対象に体験教室を開催した。

講 師：日本チェアスキー協会理事及び副会長、日本障害者スキー連盟理事、
福島県障害者スキー協会会長 小林 清美

スタッフ：県障害者スキー協会5名

事務局（本事業コーディネーター、協会職員1名）

参加者：3名（+参加者の家族3名）

名前	性別	年齢	障がい名	主に挑戦した自転車	←経験	普段主に取組むスポーツ
A	男性	10歳 未満	脳性麻痺	バイスキー チェアスキー	初	
B	女性	20代	ラーセン症候群	バイスキー チェアスキー	初	陸上（レーサー）
C	女性	50代	両膝関節機能 障害	スキー（通常の） バイスキー	※ハイスキーは初	スキー（通常の）

実 績：

●タイムテーブル

- ・ 8:00～ 集合（裏磐梯ビジターセンター駐車場）、駐車場等説明
- ・ 8:30～ 入場、用具運搬等
- ・ 8:40～ 開会式
- ・ 8:45～ フィットティング・リフト券購入
- ・ 9:15～ バイスキー体験
- ・ 13:10～ 昼食・休憩
- ・ 13:50～ バイスキー（単独滑走）、チェアスキー体験
- ・ 15:00 教室終了

●使用した用具

- ・ バイスキー × 2台
- ・ チェアスキー × 2台

●体験内容・指導方法等

※初めてスキーを体験する2名（AとB）を中心に実施。午前中は、リフトに乗車し、バイスキーをメインに介助者（バケッティング）ありで体験した。午後は、リフトには乗らず、麓の緩やかな斜面で、バイスキーの単独滑走と（より難易度が高い）チェアスキーの体験を行った。

・フィッティング

→スキー用具に座り、スポンジ・クッションを隙間に詰めるなどして調整。

・用具の使用方法等説明、試走

→基本的な用具の操作方法、アウトリガー（ストック）の使用方法等について説明とレクチャー。斜面ではなく、平地でスタッフが押しながら試走。

・滑走（リフト乗車）

→参加者★1名に対し、リフト乗降・滑走時の介助者◎として2名、先導者●1名、後方者（技術指導）■1名で班編制。

【滑走時の配置】

↑ ●先導者

★参加者（バイスキー）

◎・◎介助者（バケッティング※交代制）

■後方者（技術指導）

→リフト乗車は、介助者◎2名でスキーごと持ち上げてリフトに乗せ、ロープでリフトに固定する。安全確保のため、乗降の際はリフトを停止してもらった。

【リフト乗車時の配置】

◎

★

◎

■

介助者

参加者

介助者

指導者

●まとめ（参加者感想等）

・普段は陸上競技（レーサー）に取り組む20代の女性は、バイスキーは初めての体験であり、思っていたよりもスピードが出て気持ちよかった、また、介助者（バケッティング）のおかげで安心して滑ることができたとのことだった。

10歳未満の男児は、父親と一緒に参加し、今回、車いすユーザーでもリフトに乗ってスキーができることが分かってよかったと話し、次もチャレンジしたいと積極的な意欲を見せていた。

・今回、介助者（バケッティング）は、福島県障害者スキー協会のスタッフ2名（健常者・男性）の他、事務局の協会職員1名（健常者・男性※スキー経験あり）、参加者の父親1名（健常者・男性）が担当した。単独滑走は難しかったため、終始バケッティングが必要であったが、特に急斜面では負担が大きいことから、安全な体験には慣れている指導者の必要性も感じた。

【12月19日(日) 第1回パラスキー体験教室の様子】



↑ 開会式



↑ バイスキーのフィッティング



↑ リフト乗降のレクチャー



↑ リフト乗車



↑ バイスキー体験 (バケッティングあり) ↑



↑ チェアスキー体験



↑ バイスキー体験 (単独滑走)

～パラスキー体験教室～

①第2回パラスキー体験教室

日 時：令和4年1月23日(日) 8時30分～14時00分

場 所：グランデコスノーリゾート（耶麻郡北塩原村桧原荒砂沢山）

概 要：福島県障害者スキー協会と連携し、公募した参加者を対象に体験教室を開催した。

講 師：日本チェアスキー協会理事及び副会長、日本障害者スキー連盟理事、
福島県障害者スキー協会会長 小林 清美

スタッフ：県障害者スキー協会4名
事務局（本事業コーディネーター、協会職員1名）

参加者：1名（+参加者の家族3名）

名前	性別	年齢	障がい名	主に挑戦した自転車	←経験	普段主に取組むスポーツ
A	女性	10代	二分脊椎	チェアスキー	初	車いすバドミントン、 車いすバスケットボール

※他2名（10歳未満の男児※第1回教室の参加者と20代男性）の申込みがあったが、新型コロナウイルスの影響を踏まえ、直前に欠席の申し出があった。

実 績：

●タイムテーブル

- ・ 8:00～ 集合（裏磐梯ビジターセンター駐車場）、駐車場等説明
- ・ 8:30～ 入場、用具運搬等
- ・ 8:40～ 開会式
- ・ 8:45～ フィットティング・リフト券購入
- ・ 9:15～ スキー体験
- ・ 12:00 教室終了

●使用した用具

- ・ バイスキー ×1台
- ・ チェアスキー ×1台

●体験内容・指導方法等

※新型コロナウイルスの影響を鑑み、昼食は設けず、午前中で終了することとしたこと、参加者が1名となったことから、バイスキーとチェアスキーの試走後に、（本人の意思により）チェアスキーを主に体験することとした。

- ・ フィットティング
→スキー用具に座り、スポンジ・クッションを隙間に詰めるなどして調整。

- ・用具の使用方法等説明、試走
→基本的な用具の操作方法、アウトリガー（ストック）の使用方法等について説明とレクチャー。斜面ではなく、平地でスタッフが押しながら試走。
- ・滑走、リフト乗車
→参加者は体幹が安定していたため、介助者が後ろでチェアスキーを支えながら滑走するも、緩斜面では介助をなくして単独滑走をするなどできた。
→リフト乗車は、第1回教室と同様、介助者2名でスキーごと持ち上げてリフトに乗せ、スキーを左右で支えて移動した。安全確保のため、乗降の際はリフトを停止してもらった。

●まとめ（参加者感想等）

- ・参加者は、普段から車いすバドミントンやバスケットボールなど、様々なスポーツにチャレンジしているものの、スキーは初めての体験であったとのこと。スピードが出て楽しかった、またやってみたいと話した他、安全な転倒方法など丁寧に指導をしてもらえたことに安心できたとの感想も述べていた。
- ・計2回の体験教室を経て、競技の特性上（特に安全性の観点から）、指導の重要性はもちろんのこと、リフト乗降時の注意や介助者（バケッティング）に慣れた指導員が不可欠であると感じた。

▶各体験教室（会）の実施を通して

・パラサイクリング、パラスキーとともに始めて体験する方が多く、過去に経験したことがある方でも数える程度の回数であった。

参加者からは、「想像していた以上にスピードが出て楽しかった、気持ちよかった」という感想に加え、「こうした(体験教室等の)機会がないとなかなか体験できない」、「また挑戦したい」という感想も多く聞かれた。

・また、用具のフィッティング（例：ハンドバイクは各自車いすへの装着など調整、スキーは身体と用具がフィットするようにスポンジやクッションを使用する他、シートベルトで複数箇所固定するなど各個人に合わせた調整）や用具の扱い方（例：サイクリングはブレーキの掛け方、スキーは転倒方法やアウトリガーの使い方）に加え、安全面の観点（例：サイクリングは慣れてきた頃に他者と衝突したり、スピードを出し過ぎたりする傾向にあるため、周囲の安全確認の声掛け、スキーは介助者（バケッティング）やリフトの乗降補助が必要であること）からも、競技指導に精通したスタッフやエンジニアによるフォローが不可欠であった。

→したがって、今後も用具の貸出に際しては、関係競技団体が実施する教室等に参加してもらうなど、十分に用具の使用方法及び競技の理解を深め、安全に取り組んでもらう体制を整えることが必要であると感じた。

【1月23日(日) 第2回パラスキー体験教室の様子】



↑ 開会式



↑ バイスキーのフィッティング



↑ チェアスキーのフィッティング



↑ アウトリガーのレクチャー



↑ リフト乗車



↑ リフト降車



↑ チェアスキー体験 ↑



4 評価指標（評価結果、課題等）

（1）体験教室の参加者数

・・・体験教室の対象者は、肢体不自由児・者等に加え、（多様性理解の推進のため）障がいのない人も含めた県民を想定。

①パラサイクリング ※当初1回：1泊2日で開催予定であったが、1日×2回とした。

- 目標：障がいのある人の体験 6名（1～2日目）
+障がいのない人の体験 10名（2日目） ⇒計 延べ22名
- 結果：障がいのある人の体験 7名（1回目）+6名（2回目）
+障がいのない人の体験※ 9名（1回目）+9名（2回目）
※参加者家族、初めて体験する指導員含む ⇒計 延べ31名

②パラスキー

- 目標：障がいのある人の体験 5名（各2回）
+障がいのない人の体験 5名（各2回） ⇒計 延べ20名
- 結果：障がいのある人の体験 3名（1回目）+1名※（2回目）※予定は3名
+障がいのない人の体験 0名 ⇒計 延べ4名

（2）貸出利用者数

・・・貸出の対象者は、新たな競技に挑戦することを希望する肢体不自由児・者及び身体の成長により現状の用具の更新を検討している肢体不自由児等を想定。

- 目標：1台につき月4人を目指す（休日に稼働のイメージ）※いずれもシーズン中
- 結果：上記体験教室における貸出のみ

▶（1）、（2）結果に対する評価及び課題等について

・「体験教室」については、新型感染症への対策もあり、事前登録の参加者及び家族、指導員のみ限定して実施した。このような中でも、パラサイクリングについては、目標を上回る方に体験してもらうことができた。特に、家族や（サイクリング用具に始めて触れる）指導員等も、空いている時に自分で乗車し、体験する様子が見受けられ、障がいのある参加者と一緒に走行したり、チームを組みリレーを実施したりするなど、積極的な利活用が図られた。

一方、パラスキーについては、フィッティングと使用方法の説明など、乗車して体験するまでに一定の時間を要するため、今回は、家族など障がいのない人に体験してもらうことは（安全性と時間を加味して）、難しいと判断した。

また、本県は多くのスキー場を有しているが、スキーに馴染みがない家庭（地域）にとっては、そもそもスキー場まで自家用車で来場することが難しいこともあり、参加者数が伸び悩んだという課題もあった。

・なお、「貸出利用者数（個人への貸出）」については、体験教室での実績等も踏まえ、やはり十分な指導や練習がないままに、用具だけ貸出することの懸念が大きいことから、原則として、各競技団体が開催する体験教室等に参加するなど、練習を重ねた後、個人への貸出等を検討することとした。

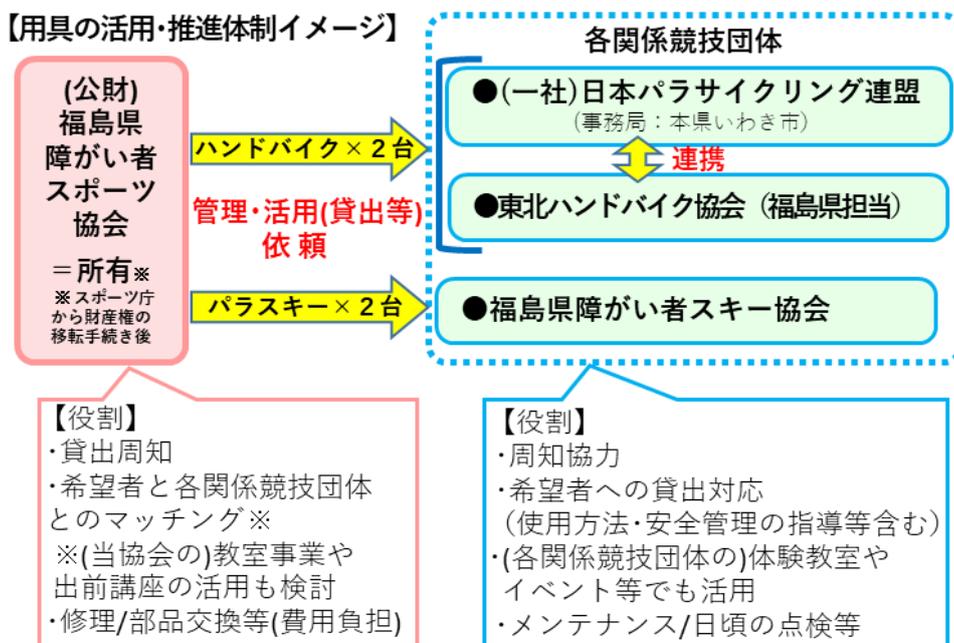
5 今後の活用及び推進方法

今回整備したスポーツ用具について、ハンドバイク2台は、(一社)日本パラサイクリング連盟及び東北ハンドバイク協会(福島県事務局)に、バイスキー及びチェアスキーは、福島県障害者スキー協会に、普段の管理(保管)・活用を依頼することとした。

当協会は用具の貸出について広く周知し、要望があった際は競技団体と連携の上、該当希望者への指導及び貸出を行うこととしていく。

※用具のレンタル費用(メンテナンス料)及び指導等に必要な費用については、各競技団体が設定し、希望者から直接徴収することとする。

また、当協会は、学校や福祉施設、サークル等での希望があれば、出前講座など出張して対応することも検討していく他、(用具を管理いただく)各競技団体が独自に開催する教室やイベント等でも積極的に活用していくことで、既存の教室やイベント等においても、これまで以上に多くの方に参加してもらえるようにしたい。



・まだまだ多くの障がい児・者が、専門的な競技スポーツを体験できる機会も、知るきっかけも少ないことから、当該事業で整備した用具を活用することで、これまで以上に様々なスポーツに挑戦してもらえる体制を作り上げていきたい。

本報告書は、スポーツ庁の令和3年度委託事業として、公益財団法人福島県障がい者スポーツ協会が実施した令和3年度「障害者スポーツ推進プロジェクト（障害者スポーツ用具活用促進事業）」の成果を取りまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等にはスポーツ庁の承認手続きが必要です。